

ニューズレター 別冊

全国公共図書館協議会

平成29年1月20日

(〒106-8575 東京都港区南麻布5-7-13 東京都立中央図書館内)

【全国公共図書館協議会研究集会講演記録】

テーマ 利用行動と利用意識から見る「場」としての図書館

講師 愛知工業大学工学部建築学科 教授 中井 孝幸

平成28年7月8日(金)に開催された全国公共図書館協議会研究集会の講演記録を別冊としてまとめました。

今回は、中井教授の調査・研究をもとに、図書館に何が求められているかということを中心に建築の視点から御講演いただきました。

なお、この講演記録は実際の講演内容を再構成したものです。

はじめに

ただいまご紹介にあずかりました、愛知工業大学の中井と申します。今日は大変たくさんの方々が来られておりまして、大変緊張しております。私は先ほどご紹介がありましたように、建築という分野から研究しておりまして、利用者が図書館をどのような思いを持って利用されているのか、実際どこに滞在されているのか、ということは今まで研究してきております。

今まで、全国で公共図書館と大学図書館を合わせて、大体50館ほど調査をしてきました。そろそろ何かきちんとまとめないといけないなと思ってはいるのですが、こういった会にお呼びいただきまして、その都度、少しずつまとめていけたらと思っております。

今日は96枚という大変多くの資料、スライドを持ってきましたので、大変駆け足でございますけれども、皆様に少しでもご参考になればと思ひまして、いろいろな事例の紹介を中心にお話ししていきたいと思っております。それではよろしくお願ひいたします。

自己紹介

中井 孝幸

Takayuki NAKAI

博士(工学)

一級建築士

愛知工業大学 工学部 建築学科 教授

日本図書館協会 施設委員

研究のテーマ

- ・「場」の概念からみた図書館における来館を促す建築的魅力
- ・図書館における「ゆるやかな機能連携」と「場」の階層性認知
- ・ユニットケア型特別養護老人ホームでの生活拠点形成
- ・子どもの発達段階と空間認知など

2

図1 研究テーマ

先ほどご紹介がありましたけれども、この「場」の概念から見たとか、赤字で書いてある、科学研究費、科研費というのもので、3年間、研究費をいただいていたので、それを少しお話しします 図1。

もともと私は病院の建築の研究をずっとしていたのですが、大学院のときから図書館に移りまして、そこからずっと図書館、学校、病院、福祉施設などの建築を研究しています。



写真1 研究集会の様子

皆さんは、公共の図書館のお立場の方々が多いと思いますが、現在、大学図書館のほうでも調査をしております、今、大学図書館でどのようなことが行われていて、それはまた公共図書館にも大変参考になるのではないかと思いますので、今日は公共図書館と大学図書館、それぞれあわせてお話ししたいと思います。

ご存じのとおり公共図書館は、貸出型から滞在型、課題解決型というふうに変化して来ると、私たちの建築計画学の教科書にもこのように書かれております。

大学図書館のほうは、個人学習から少しコミュニケーション、話しながら勉強するということが、ラーニングcommonsというものが、全国の大学で整備が進んでおまして、両方とも「場所」という言い方もあるかもしれませんが、「場」としての図書館というものへの関心が高まっているのではないかと考えております。

私たちはそういった意味では、公共図書館や大学図書館で、来館者の方々に直接、アンケートを配っております、それは入館時にアンケートを配布し、退館時に回収しています。ですから、入館と退館のときに時間をちゃんと書いておまして、お一人お一人の滞在時間も把握しております。

そのほかに、調査員が各フロアに分かれて巡回します。そこで何をされているかということ調査用紙に書いていく、巡回プロット調査というものをしています。

あとは、ちょっと後で出ますが、追跡調査というのも行っております、そういったものも少し、あわせて皆様にお話ししたいと思っております。

こういった調査から、「にぎわい」の場というものが形成されておまして、そういったものから利用者が図書館に何を期待しているのかということ、あるいは公共と大学で共通点、あるいはそれぞれ違う点が当然あると思えますけれども、そういったものも一緒に整理をしていきたいと思っております 図2。

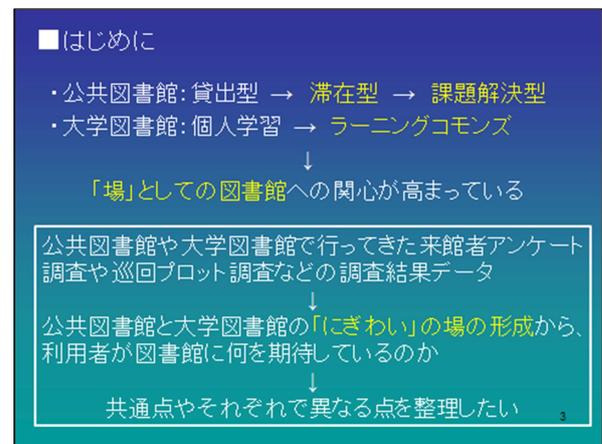


図2 公共図書館と大学図書館

まず、公共図書館で利用者を惹きつける図書館サービスということで、これは私の学位論文の際、最後の結論として上げたものです 図3。

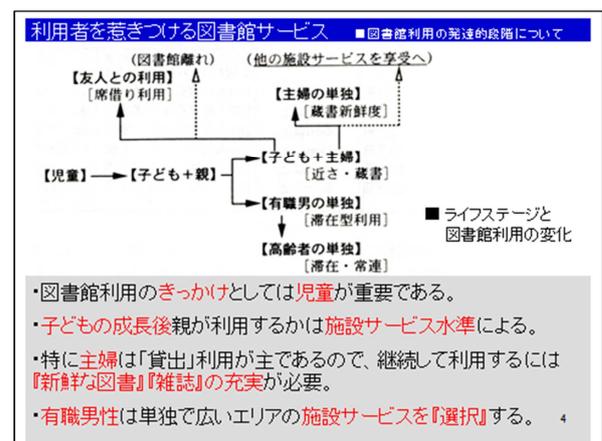


図3 公共図書館と大学図書館

公共図書館を使うときには、やはり子供が大変重要、きっかけになっているのではないかと

考えています。子供さんが利用するというのもあって、それを親御さんが連れていくことになります。親と子供がファミリーで利用し、子供は小学生ぐらいまではよく来てくれます。子供さんを連れていくのはだんだんお母さんになってきまして、お母さんと子供がよく使う。

その子供がやはり中学生になりますと、今度は親ではなくて友達と図書館を来たがる、あるいはクラブとか塾が始まって、図書館を離れていってしまうというようなことになります。

一方、では、お母さんはどうかというと、お母さんは実はそのまま本を借りていってくれます。皆様もよく中を見ていただくとわかつて思います、女性の方は大変よく本を借りていると思います。あるいは、リクエストとか予約とかを入れられる方はほとんどが女性だと思います。

そういった主婦の方々は大変図書館の本をちゃんと読んでいるのですが、やはりお母さんたちは本を借りることがメインなので、どちらかというと、新しい本が入っているかということに重視していると思います。あとは、お母さんは英会話だったりテニスだったりお料理だったり、いろいろな活動を地縁的なつながりでされています。ですから、図書館だけではなくて、ほかのサービスも使われていますから、その図書館利用につなぎとめておくためには、やはり新しい本をきちんと用意しておくということが大事だと思います。

それから一方、「有職男性」と書いてありますが、お父さんたちは実は1人で使うようになります。多分、どこの図書館もそうだと思いますが、高齢者の方々のほとんどが男性だと思います。それは、定年退職した後の行き場がなくて、やはり図書館を利用されている方が大変多いということもあるかと思います。

実はこのお父さんたちというのは単独で来られて、この人たちは滞在型利用なのです。大変長く時間を使います。週に数回以上、もうほとんど毎日来られる、常連客です。その人たちが65歳になって、高齢者になってもずっと使い続

けるということになっています。

ですから、ある一家で、ライフステージと言いますけれども、そういったライフステージの中でも、各図書館で求められているものが違うということがわかります。

今日はあまりお話ししませんが、お父さんたちはどちらかというと、大きな図書館へ行きたがりです。蔵書冊数が多いところに行きたがりです。お母さんたちは、どちらかというと近いところに行きたがりです。

私たちが調査をさせていただいた結果は、ほとんどが地方都市です。ですから、東京都か関東圏の公共交通機関が大変発達しているところでは合わないことはあると思いますが、日本の7割ぐらいは、ほとんどが地方都市ではないかなと思っていますので、どちらかというと、地方の利用状況のことをお話ししているということを見ていただければと思います。

また、私たちが調査をさせていただいているときに、アンケートの項目で、図書館に対するイメージをお聞きしています。図書館の皆様から見たら、図書館に対するイメージとは何かと、ちょっと怒られるかもしれませんが、私たちとしては、利用者の方々の周りには、公民館、美術館、博物館、体育館など、いろいろな施設があるわけなので、そういった中で図書館というものに対してどのようなイメージをお持ちかということをお聞きしています 図4。



図4 利用者の新しい図書館に対するイメージ

やはり「知りたいこと・調べたいことがわか

る」というのが6割ぐらい、非常に高い値を示しておりますけれども、「新しい興味や関心が見つけれられる」だとか、「気分転換できる」というようなことも、35%、25%ということで、大変多くの方々に答えていただいています。図書館というのは比較的、日常の施設、リピートの施設だと言われておりますけれども、利用者の方々の中には、ちょっと気分転換、要はそういった非日常性を期待して利用されている方もいらっしゃるということだと思います。

それから、これは来館者調査ではなくて、地域調査という、地域の方々に対して、いろいろな施設がありますけれども、その中で図書館を使っているかという調査をすると、地域人口に対する利用者の割合というのは、約30%です。これは20年前に調査した結果ですがけれども、多分、ほぼ変わっていないと思います。

これは、私たちは三重県の津市というところで調査させていただきましたけれども、慶應義塾大学の糸賀先生が、千葉県柏市でも同じような調査をされていて、そのときもやはり、地域人口に対する利用者の割合というのは30%ぐらいでしたので、多分、これはほぼ変わらないのではないかと考えています。

これが高いか低いかというと、非常に高い割合です。公民館とか体育館は10%ぐらいしかありませんので、そういった意味では、図書館の3割というのは非常に高いとさせていただいていいと思いますけれども、依然、7割の方々は図書館を使っていないということはあると思います。

一番多いのは35%で、ホールが一番高いです。でも、ホールは月に1回使うような施設ではございませんので、そういったことを考えますと、図書館の3割というのは大変高いと思います。けれども、やはり残りの7割の方々がまだ使っていないということがありますので、この7割の方々に対して、もう少し近づきやすく接しやすい、親しみを持って使われるということを考えていく必要があるのではないかと考えています。

1 図書館における居場所形成

今までが私の学位論文の話でした。8年かけて書いた論文を10分ぐらいで話しましたが、これからは愛知工業大学に移ってからの研究の成果です。

これはそのアンケートをやったときの10分刻みの滞在時間の分布を示しております 図5。今、滞在型と言われておりますけれども、10分刻みで利用者さんを見ると、やはり20分というのが一番多いです。やはりその20分で帰られる方が大変多くて、30分ぐらいまでの方々を足し算すると、4割から5割ぐらいです。ですから、1日に来られている半分とか4割ぐらいの方々は、30分未満で帰られているということです。

しかし、平均滞在時間をとると60分ぐらいになります。それはなぜかということ4時間以上勉強している人たちがいるからです。岡崎、日進、碧南、田原、稲沢、これは全部愛知県内の図書館を調べていますが、愛知県は学習室というのを図書館の中につくっています。ですから、勉強目的の学生さんが使っているので、ちょっと滞在時間が長くなっているかと思っておりますけれども、このような形になっています。

ただ、私が三重県でやったときの20年前の調査では45分ぐらいでしたので、それに比べると、これでも滞在時間は少し長くなっているかと思っております。

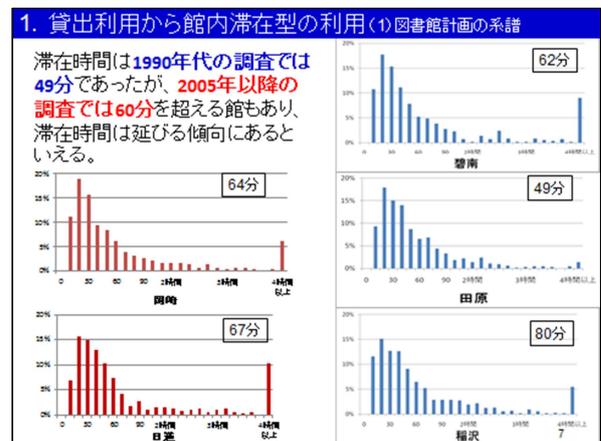


図5 貸出利用から館内滞在型の利用

こちらは少しわかりにくいかもしれませんが、この青い上のほうのラインが、実はプロット調査という方法で、巡回して調べたときに座っている人の数を数えています。要は、椅子に座っている人が、そのときにいた滞在者数に占める割合です。分母が滞在者になっています。10分とか15分置きに調査しますので、時間ごとの刻みでやっています 図6。

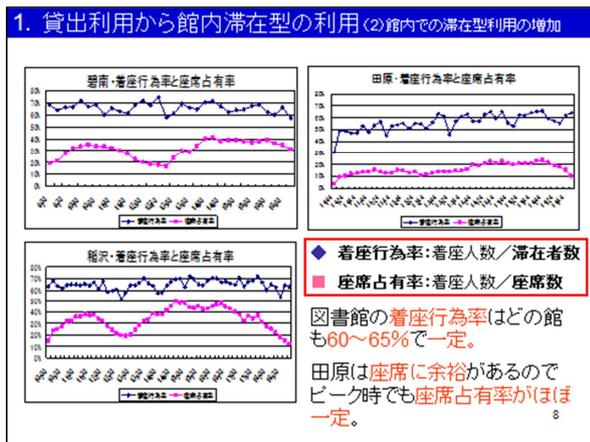


図6 貸出利用から館内滞在型の利用

これを見ていただきますと、午前中とかお昼からの人たちがよく座っているということはあまりございません。朝に来ている人も、昼に来ている人も、夕方に来ている人も、ほぼ座っています。この座っている人たちは、多少ずれておりますけれども、平均で65%ぐらいです。ですから、そのときにいらっしゃる3分の2の人が座っているということになると思います。

まず、これは要するに分母が滞在者数です。座席数、要はその席数で見ますと上がり下がりがあります。これは入館者のピークにほぼ形が比例しているのですが、それでもこれは10月、11月ぐらいに調査していますので、秋の10月、11月ぐらいの調査でいくと、大体50%ぐらいです。要はピーク、一番多いのは2時半ぐらいです。多分、皆さんも大体そうかと思います。2時半ぐらいが一番多いと思います。そのときでも50%ぐらいです。

これは学生の試験期ではありません。普通の期間のときです。ですから、席もそうだと思いますが、4人がけの席に4人座るということは

ほぼないと思います。ですから、基本的には2人。あるいはカウンター席でも1席ずつ必ず空けて座ると思いますので、一番多いときでも大体50%ぐらい。これが多分、マックスだと思っています。

ですから、こういった調査結果を使っていくと、大体図書館に何席の座席数が要するのかというのは、逆算することもできるのですが、それはちょっとお話しとしては、また違う機会にしたいと思っています。

それでは事例として、愛知県の田原市の図書館を皆さんに見ていただきたいと思っています。田原市の図書館は、少し複合しているのですが、この細長い、もともと駐車場があったところに図書館が後から増築されました。

平面図上の点は、1日に行っていた人たち、プロットの数です。赤いのは女性、青いのは男性です。このように館内全体に。これは1階です。2階建てなのですが、今日は1階だけお示ししています。このようになっています。

それで、アニメーションをつくりましたので、見ていただきたいのですが、この赤いのが女性、青いのが男性です。これが10分刻みで動いております。皆さん、見ていただいたらわかると思いますが、結構人が動いていると思いませんか。ずっとひとところにいるというわけではなくて、結構動いています。

ですから、滞在時間が20分、30分というお話もしましたけれども、結構、中の利用者の方々は、じっと1時間ぐらい同じ席に座っているということがあまりなくて、実は動かれています。

あとは、人気の席はあることはあるのですが、隅々までいます。人がこんなところいないかなと思うようなところにも人がいます。ですから、隅々のところにいますし、結構人が動いているということです。

今日のこれではちょっとわからなかったかもしれませんが、女性のほうが立っている割合が高く、男性のほうは座っている割合が高いです。男性は、図書館の中で本を読むので、座ります。女性は本を借りて帰るので、本棚の

間に立って探しています。明確にその差が出ております。

一方、もう一つ、岡崎です。岡崎の図書館、これは2階建てですが、大変大きな90万冊の市立の図書館です。天井が高くて、2階のポピュラー・ライブラリーと言われていたところは天井の高さが5メートルぐらいあります。子供の図書館と一般のところがちょっと、エントランスホールというか、通路で別空間に分かれています。そして、1階にレファレンス・ライブラリーということで、専門書が置いてあるということです。

これは日進の図書館です。日進の図書館は、ポピュラー・ライブラリーとよく言われるところの隣に子供図書館があります。真ん中に雑誌コーナーがあります。2階はレファレンス・ライブラリーというふうになっております。

この岡崎と日進の図書館で調査をしたときに、なぜこの図書館を選んだのかという理由を聞いています。今まで図書館の調査をするときは、ほぼ「図書が充実している」か「家から近い」でしたが、「館内が明るい」というのが3番目に、結構高い割合で選ばれています 図7。

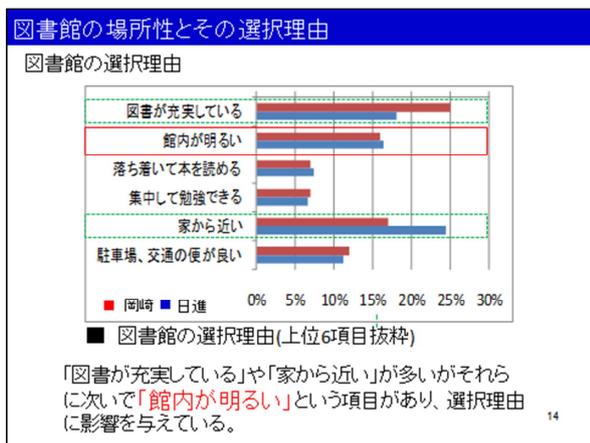


図7 図書館の選択理由

図書館というのは、明るさに対しては非常にナーバスな建物ですが、利用者にしてみれば、やはり暗くじめじめした図書館よりも、どちらかというと、窓が大きくて明るい図書館のほうがいいということがある。光の扱い方は大変注意しなければいけないと思いますけれども、館

内が明るいということは、それなりに評価をされております。明るさというのは単純な照度だけではなくて、私は開放感だとか吹き抜けとか、そういったものもひっくるめて、そのものも選ばれているのではないかと考えています。

こちらが日進のプロット図です。こちらの変わった形をしているところが学習室です。あとは、どこが一番人気かというところ、2階の吹き抜けに面したカウンター席です。やはり吹き抜けだとか窓際の席とか、そういったところが大変人気の席になっています。

こちらは日進のアニメーションです。これも同じように見ていただきたいのですが、こちらが学習室です。ですから、ここで若い学生さんとか、一般の成人の人が勉強していますけれども、彼らもじっとそこで勉強しているわけではなくて、ちょっと動いています。ですから、学生も、私たちが調査していると、結構一般のほうに出てきます。児童書のほうに昔懐かしい本があったり、あるいは難しいことが実は平易な言葉で説明してあったりしますので、そういったことで児童書のところに結構来ていたりします。あとは雑誌もあるので、そういったことで来ていたり、人恋しいのか、こういう人通りが多いところの大きなテーブルの隅っこに座る率も高くなっている。これはいろいろな図書館で実はそんなことになっています。

やはり、先ほど見ていただいたように、田原と同じように人が動いているということと、隅々まで動いているということがわかりました。

岡崎と日進で大変おもしろい結果が出ましたので、ご紹介したいと思います。実は子供たちの利用ということで見ますと、先ほどお話しした岡崎は、これは実は設計のワークショップをやっているときに、岡崎城と、徳川家康が生まれた菩提寺があるので、その軸線を大事にしたいということになり、結果、一般開架と児童開架が明確に分かれてしまったのです。階が変わっていることもあるのでいいかとは思ったのですが、ここを見ると、実は子供たちだけで利用している場面が大変多く観察されました。そ

それは別に悪いことではないのですけれども…。

一方、日進市のほうでは、子供と親御さんが一緒に使っているという場面が多くなります。

私たちは姿勢に着目して見たのですが、実は岡崎のほうは床にしゃがんでいる人たちが大変多かったです。床にぺしゃっと座っている。子供たちなので、そういったことは多いのではないかと思われるかもしれませんが、一方で、日進はちゃんと椅子の上に座っている子供たちが多い。

これはなぜかなと思ったときに、実は岡崎の本棚が、長いところで7連あります。1連は900なので、7連だと6.3メートルです。そうするとやはりなかなか書架の間から、閲覧席が空いているのかどうかが見えないというのもありまして、回り込んでいくのが面倒くさいので、子供たちはそこで座ってしまうのです。親子で使わずに子供たちだけで来ているので、だらしなく座っている感じなのです。日進のほうは書架の台数が5連です。それで書架の間から閲覧席が見えています。ですから、空いているかどうかわかるので、彼ら、子供たちは座っている。

これは大変大きなことだと思いました。これは別に設計者が悪いわけではありません。多分、打ち合わせのときに、図書館の方々は大変本をたくさん置きたがると思います。やはり開架にはたくさん本を置きたい。1冊でも多く置きたい。やっぱり1連でも多く置きたい。ですから、効率的に置くことを考えると、連数を長くして規則正しく置いたほうが大変たくさん置けます。けれども、それによる弊害もやはり生まれているのではないかなと思いますので、そのあたりは上手に考えていただきたい。

特に子供のところです。子供のところは5連以下にしていきたいと思います。大人のところは6連でもいいかなと思いますが、7連はやっぱり長いと思います。まあ、大人はぎりぎり7連でもいいかなと思います。

あとはその一方、これだと岡崎さんがちょっとかわいそうなので、岡崎さんの大変いいところを言うと、YA(ヤングアダルト)が実は岡

崎のほうがよくて、日進はここが児童コーナーで、ティーンズコーナーというのがこのそばにあります。このティーンズコーナーはよく利用されています。けれども、私たちがプロット調査をしたときに見ると、ここは子供たち、要は小学生がティーンズコーナーをよく使っています。ですから、中・高生があまり使っていません。

逆に岡崎は、先ほども言いましたように、この廊下というかエントランスで分断されていますので、子供のほうにティーンズコーナーがあるのではなくて、大人のほうの特にAVとかそういった視聴覚資料とかが置いてある、比較的パソコンとかが使える、にぎやかなところにティーンズコーナーを置いていまして、これは大変よく使われていました。

ですから、彼らはなかなか立ち位置として難しいので、子供のところにあるよりは、どちらかというところと一般側のところに置いておいてあげたい。でも、図書の分類としては、やはり児童に近いかなと思ったりもするのですが、それは各図書館、もしティーンズコーナー、YAとかを計画される場合は、どういうふうに考えられてつくるかというのは、各図書館で考えられたらいいと思いますが、私としては、彼らは彼らでちょっと離してあげたほうがいいのではないかと考えております。

2 図書館の「場」としての役割

2つ目、図書館の「場」としての役割ということで、今度は大中小、大きな図書館から小さな図書館までいろいろな調査をしましたので、それぞれの図書館の特色と、「場」としての役割とありますが、図書館の役割というものは何かということをし、3つの視点から考えていきたいと考えております。

まず1つ目が小布施町立図書館です。「まちとしょテラソ」と言われておりますが、大変ユニークな図書館ができております。元館長さんが花井さんという方で、少し映像プロデュースをされていた方で、そういった方が館長をされた

ので、大変ユニークな活動をされておりました。

M L A 連携などもとても頑張って、観光の案内とかそういったものも取り組まれてきたのですが、小布施のまちのパン屋さんのご主人などを図書館に呼んで、そこでアーカイブ、要はビデオでインタビューされるんです。そのインタビューで、失われていく昔の小布施のまちの町並みであったり、どうだったかという話を、お一人お一人いろいろな方々からお聞きして、それをちゃんとDVDで加工されて、編集をして、地域資料として図書館で利用されています。

そういった活動は大変ユニークでいいなと思いました。やはり図書館というのは本、冊子媒体ではなくて、映像として残すこともできますので、インタビューを撮って、それを全部図書館でやられたというのが大変ユニークだなと思いました。

でも、これは実は1,000平米という大変小さな図書館でして、三角形という大変ユニークな形をしています。私たちも調査をさせていただいて、アンケートもして、この図書館は大変いい図書館だということが多分、利用者さんから返ってくるだろうと思っていたら、実は全然違い、アンケートの裏にご意見をお書きくださいと書いてもらおうと、もうほぼ全員から「うるさい」というご意見が多くあったんです。

それは多分、何かというと、「なまこソファ」というのがありまして、大変バウンドがある、子供たちがキャッキヤ、キャッキヤ跳びはねているところがあります。児童コーナーはこちらにあり、非常ににぎやかなゾーンです。こちらとこちらが閲覧席で、大変静かなゾーンになっています。その閲覧席の真ん中に「なまこソファ」があるのです。ここで子供たちがワイワイ騒ぐので、これがうるさいというご意見ばかりです。

ほんとうにその意見ばかりでしたので、小さな図書館なので、それはもう諦めなさいとかではなくて、小さくても静かなゾーンとちょっとにぎやかなゾーン、私はこれはやはり分けるべきだと思っています。たとえば1,000平米、800平

米の小さな図書館でも、これはきっちりやはり分けるべきだと思います。

これであそこはいつもうるさいとなると、使わなくなってしまうのではないかなと、そちらのほうが心配なので、どちらかという、やはりいろいろな方々が使われるということを前提にして、だからにぎやかなところで騒いでいるのにうるさいというのはちょっとなしにして、静かなところで騒いでいるのは、ちょっとここは静かにしようねというのは言ってもいいと思うんです。ですから、そういったことはちょっと考えさせられた事例でした。

次が、これは滋賀県の愛知川図書館です。愛知川は、表のここが図書館、これが「びんてまり」という歴史資料館、地元の資料館がくっついているのですが、そこにフィールドアスレチックがあります。こういう遊具です。これが大変、効いております。これは大変すばらしいです。図書館に公園というのは、ここの施設はそうですが、大変相性がいいと思っております。

それはなぜかという、やっぱり子供たちが本を読んだときに飽きて、何かもそもそ、ごそごそし始めるので、外で遊んでこいと。子供たちは外で、ここの遊具でがーっと遊んで、また図書館に来て、また出て行って、また帰ってきて、また出て行ってということを何回も繰り返して、半日ぐらいつとやっています。ここの一番よかったのは、子供たち同士で来る利用率がものすごく高かったのです。

ちょっとお話しするのが遅くなったのですが、私たちが調査しているのは、ずっと土曜日です。土曜日、開館から閉館までアンケート調査をさせていただいて、土曜日1日なので、たまに平日の調査もするのですが、平日と土曜であまり変わりません。

ものすごく変わるのではないかとおっしゃるかもしれませんが、割合的にも変わらないと思います。利用圏域を調べても、属性の構成を調べてもあまり変わりません。ですから、平日と土曜、使っている人たちは変わっているかもしれませんが、全体としては変わっていないのか

なと思っています。

ですから、地方都市なので、1人で子供たちが図書館に来るといのは、なかなか交通的に不利なところもあるのですが、この愛知川はほんとうに子供たち同士で来ていました。

この愛知川も大変皆様よくご存じだと思いますけれども、徹底した地域資料の収集で大変有名になった図書館です。この下が折り込みチラシです。新聞に入っている折り込みチラシを毎日集めました。

これはなぜこんなことをされているかという、求人広告もありますが、要は、このまちの中で出されている紙媒体の資料という資料を全て集める。これは大変新しくできた図書館なので、今まで歴史があったわけではないのです。まあ、当然、歴史はあったと思いますけれども、今から20年、要はこの折り込みチラシも今は価値がないかもしれないけれども、20年集め続けることによって価値が出てくるのではないかと。20年後の人たちが、ひょっとしたら地域の研究をしたりするときに使われるのではないかと。だから今からずっと集めている。

「まちのこしカード」で、いろいろな今の愛知川の状態を一生懸命集めたと言います。当然、子供たちが小学校で総合学習とかで、授業で取りまとめた冊子も、職員の方々が学校へ行かれて集めています。ですから、それはちゃんとラベルが貼られて、地域資料のところにちゃんと置いてある。

徹底してそういった地域資料が集められているということで、子供たちにも大変親しみを持っていて使われるのではないかと考えたので、そういった意味で、いろいろな活動で有名な図書館ですけれども、子供たちから大変支持を受けている図書館だということで、私は大変注目しております。それは多分フィールドアスレチックによるものではないかと思っています。

それから、これは滋賀県にある野洲という図書館です。これは蔵書冊数が30万冊なので、それほど大きいということではないのですが、ここで調査していると大変ユニークな結果が

したので、ご紹介したいと思います。

これは4分の1円の建物で、この周りがカウンター席になって、大変眺めのよい図書館になっています。この真ん中のところ、カウンターの前のところに雑誌コーナーがありまして、ここが天井が高くなっていて、大変明るくなっています。

その雑誌コーナーが一番人がたくさんいるのですが、そのときのアンケートで、なぜその場所を選んでいるかということ聞いています。そうすると、ここに座った人たちは、人がいるからだという理由を答えています。当然、雑誌を読みたいとか、そういった理由もあるのですが、人がいるから座るといことです。

結構、ざわざわしている、スターバックスのような、ああいったカフェの中で仕事をされている方がいらっしゃいますよね。私はああいうところで仕事はできないですが。それはなぜかという、周りがざわざわしているので、匿名性というか、紛れ込んで逆に落ちついている、あるいは周りが動いているものをぼんやり眺めていたりすると落ちつく。

結局、静けさだけが落ちつく空間ではなくて、人がいるからこそ、落ちつける。別にここで何かワイワイ、ガヤガヤしゃべっているというわけではないのです。でも、カウンターがここにありますので、本の貸し出しのやりとりだとか、そういった声は何となく聞こえています。それが、そのままエントランスから入ったところの雰囲気になっているんです。

ですから、こういったところに大変落ちついて座っている方々が多いなど。要は、図書館の中に都市的な空間が出てきているということが考えられました。今まで図書館というのは大変静かな空間ということで計画されることが多かったのですが、そういったにぎわいの空間、要は人がいるからこそ逆に落ちつくみたいなこと、ここに座っている人たちもいらっしゃる。

では、どれぐらいいるのかと言われると、そんなに多くない。大体10%ぐらいですので、多いと言われると多くないかなと思います。

でもそういった方々がいらっしゃるということは、これから大切になるのではないかと考えています。ですから、静かな空間だけではなかなかもう処理できなくなっているのではないかと考えています。

そして、今まで3つお話ししてきましたけれども、小さな図書館でも地域の方々に大変使われていて、地域のサロンとして使われている。そういった図書館も私は必要だと思いますし、中規模で子供たちが大変、にぎやかに遊んだり、図書館を使って勉強したりと、そういった学びの広場としての図書館もあるだろうし、あとは少し大きな図書館になってくると、やはりにぎわいの場所もできてくる。そういった図書館の中に都市的な空間が必然的に生まれてしまっているということもあります。

それぞれいろいろな役割があって、全ての図書館でそれを全て満たさないといけないということではないと思います。だから、各図書館で何が求められていて、どういう役割を果たすべきかということを考えて、そういった場所を提供していくことが大事かと思っています

図 8。

図書館規模と「場」としての役割		
規模	特徴	役割
小	地域住民の小さな活動が行われ、利用目的が本だけではない。	コミュニケーション・出会いの場 ＝「地域のサロン」
中	地域の学びの拠点として位置づけられ、児童同士でも来館して活発に利用されている。	多世代の交流、学びの拠点 ＝「学びの広場」
大	豊富な蔵書により成人男性の利用割合が高く、様々な利用が展開されている。	にぎわい・情報収集の場 ＝「都市空間の形成」

・図書館は静かに過ごせる静的空間だけでなく、にぎやかな動的空間への期待もあり、静かな空間だけではもうダメではない。

・地域のサロンとして利用されると、話し声などうるさくなってしまうので、音(サウンドスケープ)への配慮が必要。

・場の魅力は利用者や場所によって異なるが、ある程度の規模や地域によってその特色を活かして計画していくことが、今後ますます重要である。

図 8 図書館規模と「場」としての役割

1つ、先ほど言いましたように、静的な静かな空間だけでは、少しにぎやかな動的な空間への対応もなかなかできないので、静かな空間だけではもうだめではないかとも思っています。

だからといって騒いでいいというわけではないですが、ちょっと話してもいい空間をつくっ

ておけば、逆に静かにちゃんと読める。静かな空間もちゃんと用意してあげると、それで何か使い分けができるのではないかと考えています。

そういったものを地域それぞれに特色を生かして計画していただけるといいのではないかと考えております。

3 相対的な図書館の使い分け利用

次が、相対的な図書館の使い分けです。滋賀県は図書館活動が大変盛んな地域で、私は三重大学で、三重県にいたときから滋賀県の調査をさせていただいて、愛工大に行ってから滋賀県を何回か調査させていただいています。ここは東近江市の図書館のお話だけなのですが、大変ユニークな使われ方が見られましたので、お話ししたいと思います。

こちらは東近江市です。元八日市市が真ん中にありまして、この八日市市を中心とした1市6町が合併してできたまちです。これが琵琶湖ですね。琵琶湖のここに東近江市があります。

滋賀県は、中心的には八日市が一番蔵書が多くありまして、先ほども言いましたが、私は日図協の施設委員も拝命しておりますけれども、その図書館建築賞というものもいただいていますけれども、建設されてから大分時間はたっていますけれども、当時は建築賞をいただいた図書館です。

そのほか、永源寺図書館です。これは切り妻のお屋根で、ちょっとぼやけていますが、お話し室です。トトロの部屋と言われております。大きなトトロのぬいぐるみが横に置いてあるのですが、子供たちはここをトトロの部屋と呼んでいました。

愛東図書館です。この図書館は実は一度閉鎖されました。合併したときに、1市6町ですので、東近江市に7館できたわけですが、市の担当者としては多分7館も要らないだろう、5館ぐらいでいいのではないかとということで潰されて閉館になりました。

でも、閉館になった後も、地元の方々から声が上がって、やはりつくってくれということで、

元の場所ではなくて、少し規模が縮小されましたけれども、違う場所でまた愛東図書館が復活しました。

それから、これは湖東図書館です。切り妻屋根の大変ユニークな図書館です。これは図書館建築賞をもらっていて、この湖東図書館ができた後、全国に平屋建ての切り妻図書館がいっぱいできたと思います。それぐらい大変リーダー的になった図書館です。

それからこれが五個荘図書館です。近江商人発祥のまちで、多分、今はこれはもうなくなったと思います。中学校と合体したと思います。中学校の学校図書館と市の図書館分館が地域館として合体して、それで1つできたのではないかと思います。この図書館はもう今は使っていないと思います。私たちが調査したときはこれを使っていました。

それから、能登川図書館です。能登川図書館は大変大きな図書館で、博物館の隣にあるような図書館です。

それから最後に蒲生図書館です。多分、ここが一番最後にできた図書館ですが、合併をしたので、庁舎だった建物の窓口業務があったところをそのまま図書館に転用、建築的にはコンバージョンと言いますが、コンバージョンした建物です。

この7つの図書館で、実は同じ時期、1日で7館調査することは無理だったので、2回か3回に分けて、各週2、2、3か、違いますね、3館と4館だったかな……、要は2週か3週かに分けて調査をさせていただきまして、それぞれ同じ日に2館とか3館調査してまして、同じアンケート用紙でやっています。それぞれ聞いていますので、同じ日に2つ以上の図書館を使っている方もいらっしゃいました。

これがそのときの調査の結果をまとめたものです 図9。八日市の図書館が一番蔵書冊数が大きくて、能登川の図書館が次に大きな図書館ですが、ほとんどが能登川と八日市の図書館だけを使っているのかというと、これは全然そんなことはなくて、実は一番遠く離れている永源

寺という図書館も、能登川から使っていたりします。

これは逆に、蒲生から能登川に行っていたり、能登川の人が蒲生の図書館を使っていたり、結局小さいところ同士も使っていたり、大きい図書館のある人たちが小さい図書館を使いに行っていたりします。

結局、大きい図書館ばかり使うというわけではなくて、この7つの図書館をそれぞれいろいろな人たちが複雑に移動していたということがわかりました。

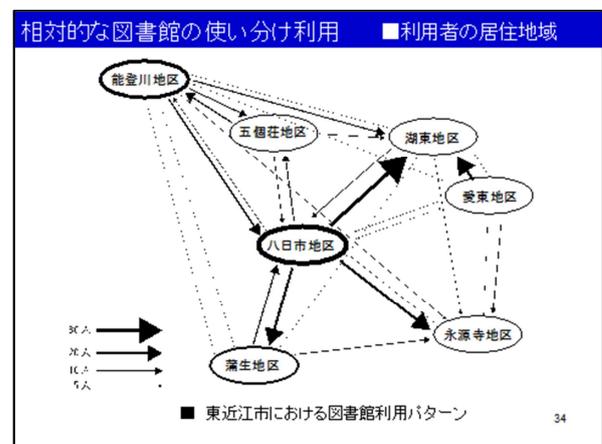


図9 東近江市における図書館利用パターン

では、なぜこの人たちはその図書館を使っているのかということちょっと見ていきたいのですが、この東近江の図書館は、それぞれが大変特徴のある、ユニークな図書館ですので、それをそのまま生かそうと考えられました。

要は八日市というのは大変蔵書が多いので、それは蔵書の拠点となります。

永源寺というのは、これがなぜかわからないのですが、遠く離れて一番端っこにあるのですが、ものすごく人気があるんです。新しいというもありますし、中の雰囲気が大変よいというのもありまして、中身としては、「食」と「農」というテーマで蔵書が集められていました。

愛東図書館は、実は大変ホスピタリティーあふれる、大変優しい職員さんがいらっしゃいまして、その人の対応がよいということで来られています。

湖東図書館は、CDとかDVDがこの中で一

番よく集まっているのです。ですから、湖東図書館はC V、DVDを充実させる。

能登川は、その地区の中に病院がありますので、医療に関する本をここに重点的に置くというように、各蔵書を少し分けられています。

そうしますと、利用者の方々になぜその図書館を選んでいくかということを知ると、その図書館の特徴的なものをやはりちゃんと選んで使われていることがわかりました 図10。

相対的な図書館の使い分け利用■各館の特徴と利用者意識									
館名	図書種別	主要な利用理由				利用者の意識			
		地域内	地域外	地域内	地域外	地域内	地域外	地域内	地域外
八日市図書館	児童書 児童書 CD DVD	読書が好き 読書が好き 読書が好き 読書が好き							
永源寺図書館	児童書 児童書 CD DVD	読書が好き 読書が好き 読書が好き 読書が好き							
能登川図書館	児童書 児童書 CD DVD	読書が好き 読書が好き 読書が好き 読書が好き							
東山図書館	児童書 児童書 CD DVD	読書が好き 読書が好き 読書が好き 読書が好き							
三軒庄図書館	児童書 児童書 CD DVD	読書が好き 読書が好き 読書が好き 読書が好き							
能登川図書館	児童書 児童書 CD DVD	読書が好き 読書が好き 読書が好き 読書が好き							
東山図書館	児童書 児童書 CD DVD	読書が好き 読書が好き 読書が好き 読書が好き							

図10 各館の特徴と利用者意識

ですから、例えばCDとかDVDを観たいと思えば湖東の図書館だし、ちょっと絵本、あるいは本を静かな環境で読みたいと思うと、永源寺のほうになるわけです。ちょっとこういう本がないか探したいと思うときは、蔵書が大きいところなので八日市に行く。

要はそういう形で、この地区外の人たちが利用するときには、それぞれそのものをちゃんと選んでいるということがわかりました。

これが追跡調査の軌跡です。このときに能登川と永源寺は追跡調査というのをさせていただいて、これは40人ぐらいを一人一人実は追いかけているのですが、こういうふうになります。

ここで何が言いたいかというと、この赤く示しているところ、人がよく通っているところです。こういう本棚、書架がほぼ同じように並んでいるのですが、皆さん通るところはやっぱり決まってくるということです。

あとはその本を探すために書架の間を抜けて

いくということがわかりましたので、今回のこの使い分け利用とは関係ないのですが、こういった追跡調査をすると、人がどこを通っているのかがわかります。

これは災害時に大変大事な話になってきます。要は、今、大変地震が多くなっていますが、地震が起きたときに、皆さんどこを逃げて逃げるかという、みんな普段通っているところを逃げるんです。ですから、この赤いところから逃げていきます。出口がそばにあるのに、そこを出たら出口があるのと思っているのに、人間がパニックになる心理としては、普段通っているところに戻っていきます。ですから、要するに普段よく通っているところは最大限安全にしたいということ、これはちらっと今、お見せします。

これは愛東図書館です。愛東図書館で大変特徴的だったのが、ちょっと写真は撮れなかったのですが、高齢者の男性がお一人で歩いて来られまして、ここにコーヒーの飲める、インスタントコーヒーのポットが置いてあるのです。それはサービスで置いてあるもので、そこにこの人は来られて、ここでコーヒーをジャージャーとつくって、ここへ座って、47分間、この職員さんと話して、それで帰ってきました。デイサービスです。(笑)

だから、この人の今日の目的は何かといたら、話しに来たんです。職員さんと話をしに来た。これは暇なとき、午前中のあまりお客さんがいらっしやらないときに来られて、47分間、しゃべって帰って行きました。でも、この人は本をどこで借りるかという、八日市の図書館とかそういったところで借りていきます。今日はだからここに、要するに職員さんとお話をしに来ているんです。これが図書館のサービスなのかと言われるかもしれませんが、僕はこれはいいと思っています。

今日は、お話を聞いていけないのですが、実はちょっとひきこもりになった子供がいらっしやって、その子供を少し社会復帰させていきたい。ですから、ちょこんとこの辺に座らせた

い。ですから、ちょっとじっと見守ってくれないかということがあって、その後、大丈夫だということで、その人はそこに来てずっとぼつんと1人で座っているだけなのですが、それが社会復帰なのです。

そういった場所としてもありますので、要するに図書館の役割というのはいろいろあるので、それだけでは困りますけれども、数あるいろいろな図書館の中でそういった役割を担うというのも、僕はあってもいいと思っております。

これが愛東の図書館から永源寺へ行った人たちです。これは同じく愛東の図書館ですが、実はこの後、永源寺図書館でもこの親子は目撃されています。この子供はここにちょこんと座っています。このときお母さんは実は本を探されていました。そのときにこの職員さんは、見守っているだけです。要はここは保育園、児童館のような感じになっております。

この職員さんは、大変優しい感じの何でも話していただける感じの職員さんなので、愛東図書館は職員の対応がよいというので皆さん来られています。

永源寺は、発表会というものをやっている、このときは「みんな展」という地元の子供の作品展でした。この永源寺というのは、地域の人たちのこういった生涯学習の活動の発表場所として使われていました。従来、こういったものは美術館であったり、公民館でされるのですが、実はこういうことを図書館でどんどんこれからやるべきだと思っております。

なぜかという、行きやすいです。全く行きやすいです。入るときに何の抵抗もなく入ってこられて、その会場を見て、帰っていくときにも、特に何か言う必要もないし、さっと帰れます。ですから、こういった展示会、学習の発表活動といったものは、どんどんこれから図書館でされても私はいいと思います。

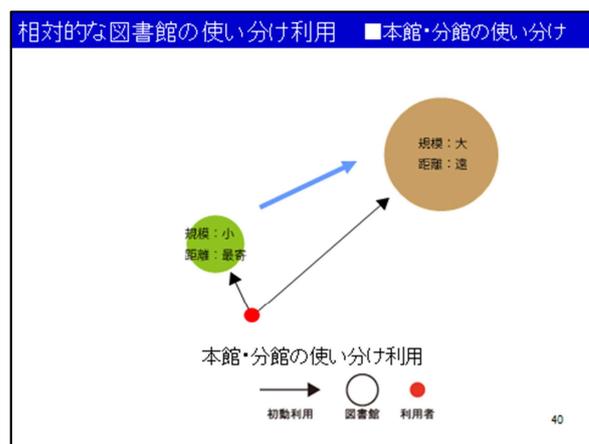


図11 本館・分館の使い分け

本館・分館の使い分けというものは、近くの小さな分館、大きな本館にたまに行くというのが、今までの使い分けだったと思いますが、今回の東近江を見ると、そうではなくて、大きい図書館は大きい図書館、小さい図書館は小さい図書館なりに、ちゃんとその特徴を持ったサービスを行えば、利用者はちゃんとそれをわかって選択しています。ですから、この選択肢をその地域の中にたくさん用意するということが大事なのではないかと思えます。

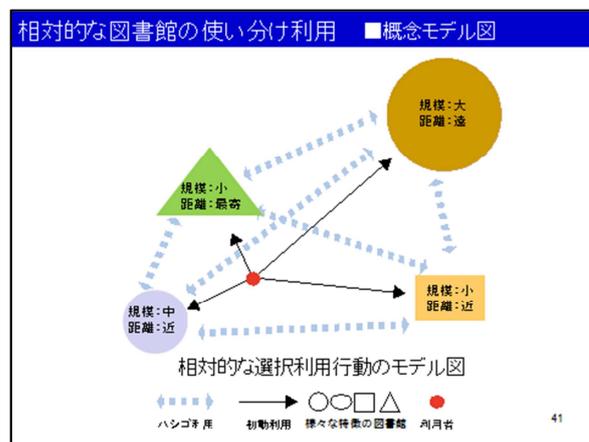


図12 相対的な選択利用行動のモデル図

なかなか難しいかもしれませんが、全ての図書館で全て同じサービスができるかというと、それは現実問題なかなか難しいと思いますので、そうすると、小さい図書館は小さいなりに、大きい図書館は当然大きい図書館なりに、要はそういった各それぞれが特徴を持ったサー

ビスをすれば、その地域の人たちがそれを選んでくれる。

でもこれも大変残念ですが、やはり車なんです。車で移動することが前提になっています。これは大問題としてあります。地方都市はほとんど車で動きますので、10分、20分ぐらいだったら平気で動きます。10キロぐらいだったら全く関係なく動きます。

話が脱線して申しわけないですが、東日本大震災で被災した南三陸町というところで実は調査をしました。そうすると、1時間くらいかけて30キロ離れたところから来て、20分だけ滞在して帰って行きました。そういう人たちは1事例ではないです。4組ぐらいいらっしゃいました。

要は、地方に行けば、車で移動するということが、距離の抵抗感が全くありません。それを前提にするのがいいのかどうかというのはあると思います。それはまた議論があるところだと思いますけれども、同じような施設でサービスするのではなくて、ちょっと特徴を持ってやるというのも一つあるかと思います。

4 大学図書館に対する図書館像

次、後半戦です。ようやく大学図書館に行きたいと思います。飛ばしていきたくと思います。

大学図書館は先ほど最初にお話ししましたように、ラーニングcommonsというものを求められ、つくられてきております。どちらかという国公立大学を中心に進められております。私なんかは自分が今愛知工業大学という大学にいますので、研究者をばんばん育てるような大学ではないわけです。

要は、その地域の教育力を支える、あるいはその地域で働く人たちを育てる、そういった大学から、当然ノーベル賞を輩出するような大学までさまざまあるわけです。そのさまざまある中で、そのラーニングcommonsというのは全部同じ作り方でいいのかというのがありまして、これは地域の公共図書館と同じで、やはり求められているものが違うので、各大学図書館

も作り方が違うのではないかということで、今、調査をしております。

今日は公共ということでお話ししていますが、今、大学図書館9館の調査をやっています。最初は愛知工業大学と大手前大学、これは兵庫県の西宮にある大学です。神田外語大は千葉の幕張です。国際基督教大学は東京です。要するに、関西、東海、関東。それで全部私立です。文系、理系、外大など、いろいろな大学をやりまして、このときはラーニングcommonsがない大学を選んで調査しています。

研究の背景と目的

- 近年、グループでのディスカッションを伴う場所と人的な側面から学習や研究支援を行うため、コミュニケーション型学習環境の「ラーニングcommons」を設ける大学図書館も増えている。
- 地域の教育力を支える大学からノーベル賞を輩出する大学まで図書館に求められているサービスは各大学で異なる。

↓

- 文系、理系、外大など様々な大学図書館で、どのような利用が行われているのかを利用意識と行動観察から捉え、利用者が求める図書館像を整理することを研究の目的としている。
- 規模や教育理念、特色ある図書館サービスの事例から、
①愛知工業大学(AIT)、②大手前大学(CELL)、
③神田外語大学(KUIS)、④国際基督教大学(ICU)を選定して、アンケート調査と巡回調査を行った。

43

図13 研究の背景と目的

これは愛知工業大学です 図14。愛知工業大学は、実は40年近くたっている古い大学で、6層の積層式書架があり、延べ床面積3,800平米ですが、蔵書が30万冊という、結構ぱんぱんな図書館になっています。

愛知工業大学附属図書館(AIT)



竣工後40年近く経った4層の開架、6層の積層式書庫で、床面積3800㎡、蔵書冊数が30万冊。



図書館外観

44

図14 愛知工業大学附属図書館

大手前大学のこれはメディアライブラリ、CELLと言いますが、大変特徴的なのは、ここはそんなに大きなキャンパスではないですが、キャンパスのど真ん中に図書館が計画されて、この開架室の横に小さな小部屋が回っています。これをCELLと言います。これは小文字のcell、要は細胞という意味のcellです。開架閲覧室の周りに小さな小部屋がいっぱいついていて、図書館が開いている6時半までは、図書館の中から使えます。これは夜9時まで使えるのですが、夜9時から今度は外廊下です。外の廊下がありまして、この外の廊下から鍵を図書館のカウンターで借りて使うという、ちょっとユニークな図書館になっています。これをCELLと言います。

これは神田外語大学です。神田外語大学は、1階に図書館、2階にMULCという、多言語コミュニケーションセンターと言いまして、いろいろなお国の民具が置いてあり、ここにネイティブの先生とか留学生たちが必ず交代で1人いらっしゃるんです。外大というのは、ネイティブの先生と話すことが一番勉強になるらしいので、図書館の上にそういった多言語コミュニケーションセンターができました。

一番大きいのは、本当は英語圏ですが、英語はこの図書館の前に実はつくられてしまっていて、これは英語以外のお国の言語の施設が入っています。これは神田。

これはICUです。私たちが調査をさせていただいたときは、実は眞子様がまだいらっやいました。佳子様ではなくて、眞子様です。耳にイヤホンをつけている屈強な人たちがいっぱいいました。写真を撮るとよく怒られるのです。「僕たちは建築の関係ですけど」と言っても、全然関係なくて、「人間を撮っているじゃないか」と怒られました。これがICUです。

こちらも同じように、滞在のアンケートをして調査をしました 図15。大学図書館もあまり公共図書館と変わらないです。滞在時間は10分、20分が多いです。やっぱり本を返しに来ているとか、ある本だけを探しに来ているとか、そう

いった人たちの利用が多くて、20分、30分が多いのですが、逆に公共と違うのが、この90分あたりのところに1つ山が、各大学でできています。

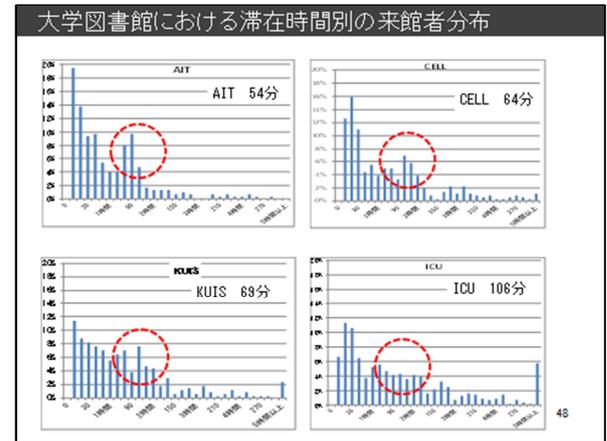


図15 大学図書館における滞在時間別の来館者分布

今、大学の講義が1コマ90分です。ですから、多分1コマ授業があくと、ちょっと休憩がてら来ている人たちがいて、その人たちがいるのでこのあたりちょっとピークが出ているかと思えますけれども、平均滞在時間としては60分ぐらい。これもあまり公共図書館と変わりませんでした。

逆に4時間以上勉強とか、5時間以上勉強は、ICUはいらっやるのですが、ほかはあまりいない。勉強していないというわけではないのですが、そういう人は比較的いなかったということです。

あとは、公共図書館で誰と来ているかということ进行调查すると、実は個人単独で来ているか、グループで来ているかと言われると、公共図書館は先ほどお話ししましたが、半分半分です。50%、50%です。単独の人50%、家族同伴50%です。

でも、大学図書館は、圧倒的に個人利用が多いです 図16。もう7割ぐらいが個人です。ICUは特に90%を超えています。1人で勉強しに来ます。ここだけがちょっと異常なぐらい勉強していますね。やっぱりちょっと違うなと。

でも、利用頻度は、週に1回ぐらいまで含めると、ほぼ80%が90%なので、非常にリピータ

ーが多いです。ですから、大学図書館はさらに公共図書館よりもリピーターがいる。ですから、図書館を使っている学生はほんとうによく使ってくれているのですが、使っていない学生はほんとうに使っていません。これは大学図書館としても、やっぱりもっと図書館を使ってくれるようにということで、いろいろ悩まれていることが多いと思います。

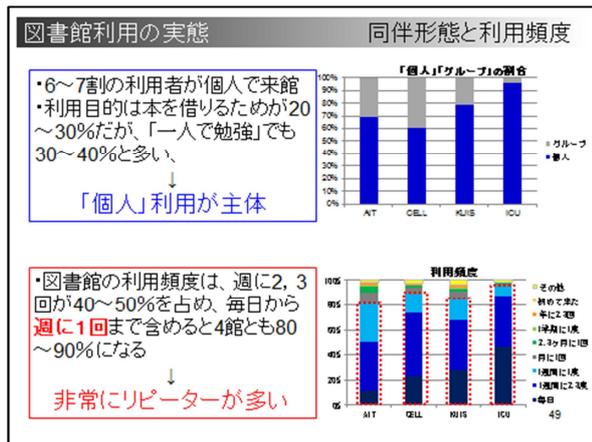


図16 大学図書館利用の実態

先ほど公共図書館でも見ていただきましたが図6、こちらが大学図書館の着座行為率と座席占有率です 図17。これを見ていただくとわかりますが、着座、座っている人の数です。ちょっとばらつきがありますけれども、ICUなんか見ていただくと90%ですね。平均で94%。もうほぼ座っています。みんな座っています。

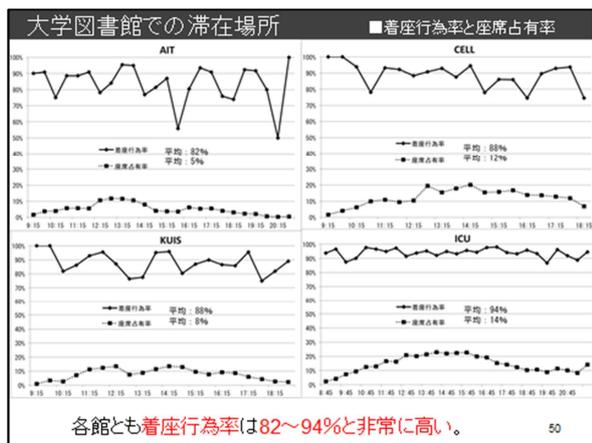


図17 大学図書館での滞在場所

ですから、これは何を指し示しているかとい

うと、公共図書館は本を借りるために本を探している人たちがいるのですが、大学図書館はみんな座って勉強しているので、着座、要は座っている人たちが大変多いです。

昔、文科省の基準で、学生の定員の10%の閲覧席をつくるという基準がありました。それはもう今はなくなったのですが、それでもやはり着座する人たちが大変多いということがわかっていただけです。

座席占有率です。これは試験期ではないのですけれども、20%ぐらいしかありません。ですから、ほぼ空いている。でも、試験のときはほぼ100%近くなります。ですから、大変席がたくさんあり過ぎて、がらがらになっている感じ、ちょっと寂しい感じはします。

次は愛知工業大学をちょっと見ていただきたいのですが、公共図書館では男性、女性と分けましたけれども、実は大学図書館では、ラーニングコモンズもありますので、しゃべっているが、しゃべっていないかに絞っています。グループというのは僕たちが調査したときに、しゃべっている人たちとしかわからないので、要はしゃべっている人たちが赤くなっています。

それでちょっとまたつくりますと、これは愛知工業大学の2階のところですが、これは1人で勉強している人ですね。ここで一番問題なのは、静かに勉強している人たちの横で、結構赤い人たちが……。ここなんか結構赤くなっていますが、要はしゃべっているんです。要は、静かに勉強している横でしゃべってしまっているというふうになっていまして、ちょっとそのしゃべっている人たちと静かに勉強している人たちが混在しています。

今度はメディアライブラリ（CELL）というところを見ていただきますと、これは1階のほうです。1階はどちらかというと天井が高くて、ここのカウンターで実はノートパソコンを貸し出しています。この8人がけのテーブルの中でも、ノートパソコンを開いて結構みんなで話し合っていました。

こういう部屋を借りて議論する人たちもいれ

ば、この大テーブルでノートパソコンを広げて、みんなで集まって議論している。要はそういったラーニングコモンズ的な使い方が、開架閲覧室全体で行われているという形です。

今度はメディアライブラリ（CELL）の地階です。地下階は実は開架ですがけれども、固定棚がずらっと並んでいて、どちらかというとな開架書庫に近い状態になっています。そこにカウンター席だけが置いてあるのですが、赤い人はちょっといましたけれども、ほぼ青くて、静かな環境でした。

ですから、愛知工業大学の場合は、しゃべっている人と勉強している人が混在していますが、このCELLのほうは、しゃべっているのが1階、静かに勉強したい人は下というふうに分かれています。ですから、明確に分けるとというのが一つ大きな考え方としてあるかなと思っています。

これは神田外語大学のところですが、これはこんな感じで、ちょっとパピリオンみたいになっているんです。ちょっとこれはやり過ぎかなと私は思っているんです(笑)。何かアミューズメントパークのような感じがしまして、でも、大変しゃべっています。結構会話していて、にぎやかに使われていました。

ここでちょっとおもしろかったのは、大学図書館と公共図書館では何が一番違うかということ、実は公共図書館は窓際の席とかに大変人が集まるのですが、大学生はああいうところをあまり使いません。どちらかというとなキャレル席という、閉じた、自分の作業に集中しやすい、この真ん中の席ですが、ここに集中しています。

ここは窓際のすごくきれいなガラスのカーテンウォールがあって、そこは全然、人が座っていないのです。人がいない。あまり座らなくて、どちらかというとな、自分で勉強、作業したいので、そういったことに集中できる場所として、こういうところを使っています。

これがICUです。ICUはこのパソコンエリアです。ここが古い図書館で、このオスマー館が新しくできたところですが、そこは旧図書

館のところには本棚があるので、新しくつくったところは地下に自動出納を入れて、上はパソコンだけという構造になります。このパソコンのところはすごい人であふれ返ってありました。

でも、この旧図書館のほうは、窓際に人がいっぱいいます。では、先ほど言ったのと違うのではないかと怒られたらまずいなと思ったので、ちょっと写真をつけましたが、この窓際が実はキャレル席なんです。隔て板と言うのでしょうか、そういうものがあるところでみんな勉強しているのです。

ICUは大変静かでした。私たちの「アンケートをお願いします」という声だけが響いている(笑)。もうほんとうに申しわけない感じで調査をさせていただきましたけれども、大変いい調査結果が得られたと思っています。

あとは、大学で文系、理系、関西から関東までいろいろな地域でやっていますが、デジタル資料とアナログ資料の使い分けについて何か差があるかというのを見てみました 図18。

ほとんど差はありません。結局、アナログ資料は深く理解したいときに使うし、デジタルはやはり短時間で調べたり、昔のデータを知りたいというときに使うと。

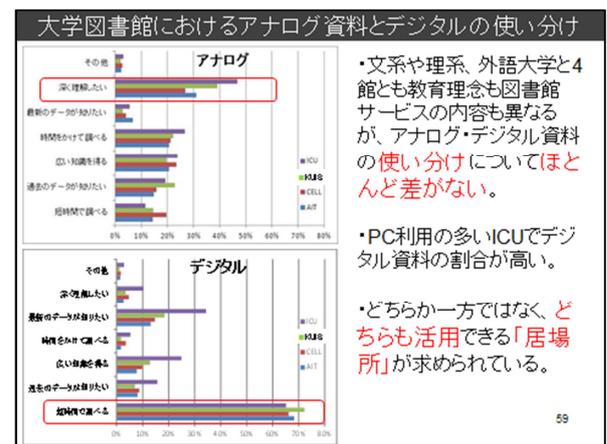


図18 アナログ資料とデジタルの使い分け

彼らはそういうふうに使っていてやっています。ですから、まだ大丈夫かなと思っています。デジタルだけに頼っているということもない感じですが。アナログの文献もちゃんと見て調べていることは、ちょっと安心をしました。

一方、各図書館で何か要望あるかとお聞きしました 図19。

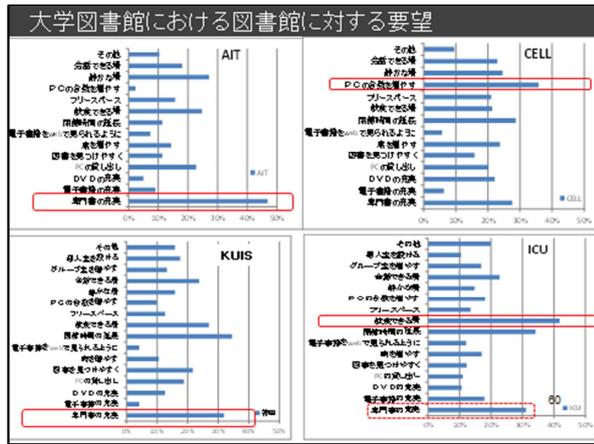


図19 大学図書館における図書館に対する要望

実は、愛知工業大学はパソコンがちょっと少ないものですから、パソコンをもっと増やせと言うのではないかと思ったのですが、全然要望として上がらないんです。本はもう腐るほどあるのですが、まだ言っています、専門書を充実せよと。

逆にCELLというのは、先ほど言いましたようにノートパソコンを貸し出ししていたり、デスクトップのパソコンも沢山並んでいるのですが、もっとパソコンを使わせると言っています。

結局、こういったところを見ると、要は自分たちが受けているサービスに対してでないと要求というのは上がらないことがわかりました。提供されている、要するに享受しているサービスに対して高くなって、受けていないサービスについては要求がわからない。パソコンの便利さがわからないということではないと思いますが、やっぱり使っていないとわからないんですね。

ですから、享受していないサービスに対する需要は掘り起こされない、これは大変僕たちは大事なことはないかと思っています。結局、面積が小さいから、あるいはお金がないから、このサービスは諦めようかと、そういうことをやると、やっぱりそのサービスに対して掘り起こされないわけです。

だから少なくともいいので、やはり偏りなくサービスというものは提供しないとイケない。その強弱はあってもいいと思いますが、やはり全くないとかゼロというのはまずいのではないかと思います、それはこの大学図書館を調査したことによってわかったことでした。

あとは、静かにするかどうかという話なので、やはり階を変えて静かなゾーンとか、しゃべってもいいフロアとか、あとは吹き抜けで分けるとか、そういったことを明快にしたほうが、彼らも使いやすいのではないかということがわかりました。

図書館サービスの提供と利用者の需要の掘り起こし

大学図書館で**図書館に対する要望**を聞いたところ、図書を利用するところは図書に関して、パソコンを利用するところはパソコンに関する**要望が高くなるなど、提供されているサービスに関心が向けられていた。**

図書館への要望については、**享受しているサービスについて高くなり、受けてないサービスについては低くなっている。**

享受していないサービスに対する需要は掘り起こされないため、普段利用する図書館で**偏りなく、多様なサービス**を各大学の教育理念に即して**提供**することが必要である。

図20 サービスの提供と利用者の需要の掘り起こし

5 図書館の多機能化とゆるやかな機能連携

では、最後のお話をしたいと思います。最後は幾つか公共と大学、少し混ぜてお話しします。

塩尻にある、「えんぱーく」という大変ユニークな、これは複合施設です 図21。それも複合の仕方がユニークで、壁でエリアとエリアの仕切りがありません。要は、図書館、子育て支援、シニア活動、ビジネス支援などいっぱいあるのですが、部屋として区切られていません。要は空気が全部つながっている感じです。ですから、複合という意味では新しい複合の形かと思っています。

駐車場がこの3階のこちら側にあります。これです。図書館は図書館、あとは休憩スペースと呼ばれる共用部というか、そういったものが大分充実しておりまして、そちらにもテーブル

がいっぱい置いてあって、いろいろな人たちがそのフリースペースと言われるところでいろいろな活動をされている図書館です。



図21 塩尻市立図書館（えんぱーく）

これは愛知県の一宮にできましたi-ビルです 図22。これはJRの尾張一宮駅の隣にできました。コンコースのプラットホームの高さと同じ高さにシビックテラスという、大変大きな半屋外空間があります。3層吹き抜けの大変大きなテラスがあります。

これは実は駐車場がちょっと少なくて、図書館利用者は1時間は無料なのですが、それ以降は30分で100円ずつ課金されていきます。



図22 一宮市立図書館（i-ビル）

これはどちらかといういろいろな施設が入っていて、壁で仕切られているタイプです。要するに、図書館、何とかというのがきっちりと壁で区画されています。

これは、住所をお聞きしているのをプロットしたものです 図23。一宮というのは駅に隣接していて鉄道もありますので、利用圏域はもっともすごく広がっているかと思ったら、実はあまり広がってなくて、この図書館中心に集まっています。

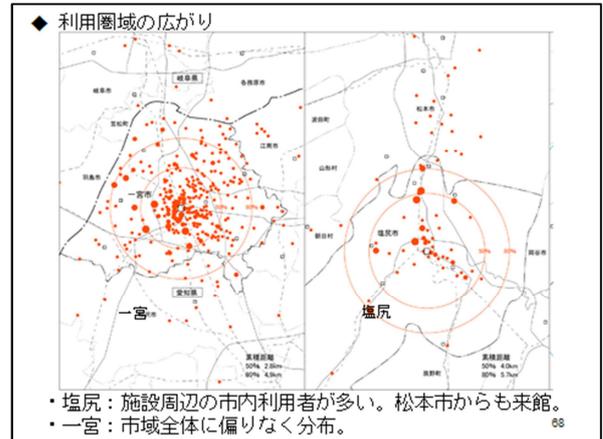


図23 利用圏域の広がり

逆に塩尻のほうが、点は少ないのですが、遠い松本市のところからも来られたりして、意外と利用圏域としては広がっているということがわかりました。

これは、なぜそんなことを持ってきたかという、実は交通手段です 図24。

■塩尻と一宮の交通手段と利用者層の割合(全体)

交通手段	塩尻	一宮	過去	属性	塩尻	一宮	過去
徒歩	9%	14%	6%	1 児童	23%	22%	26%
自転車	17%	20%	20%	2 学生	16%	13%	17%
バイク	2%	0%	2%	3 有職男	23%	21%	23%
車	64%	41%	68%	4 有職女	9%	12%	9%
バス	2%	5%	2%	5 主婦	18%	13%	21%
鉄道	4%	13%	2%	6 高齢者	6%	10%	4%
他・不明	2%	7%		7 不明	6%	10%	
総計	100%	100%	100%	総計	100%	100%	100%

・過去の調査は車が7割であったが、一宮は車が約4割、塩尻65%。
 ・一宮は徒歩、鉄道もそれぞれ約10%増となっている。
 ・立地と駐車場の問題が大きく影響していると考えられる。

・一宮は主婦が約10%減少し、高齢者が増加。
 ・主婦は家族連れでの利用が多く、「近さ」を優先していた。
 ・主婦層は図書の貸出が主目的、男性層は移動するか本を購入。
 ↓
 ・一宮では家族連れの子どもの利用が減少しているのでは？

図24 交通手段と利用者層の割合

やはり塩尻は車が64%です。今まで過去の愛知県だとか三重県とか滋賀県とか、そういった調査をしたとき、大体7割ぐらいが車で来ます。多分、東京とか関東のエリアの方々は、

そんなに多いのかと思われるかもしれませんが、とても多くて、車が8割のところなんです。

ほぼ車で来るのが当たり前となっているところで、一宮は40%しかいない。やはりこれは駐車場問題が大きく影響していると思います。この駐車場問題が誰に影響しているかというと、実は主婦層にあらわれていて、一宮は主婦層がちょっと少なくなっています。逆に何が増えているかというと、高齢者の方々が大変増えています。要は駅に近い人たちが集まってきて、新聞を読んでいるとか、雑誌を読んでいるとか、DVDを観ています。

主婦層は子供を連れてきてくれる、大変大事な役割を担っているのですが、お母さんたちが減ると、実は子供たちも減ります。だから、ちょっとだけですけども子供も減っています。

ですから、やはり中央館としてはいろいろな人たちに来ていただきたいというのがありますので、地方都市である車の問題というのは避けては通れないと思っております。駐車場問題で何が問題かというと、要は利用者層に偏りが生じてしまうということです。要は利用者が来なくなるということが大変よくないと思っております。そういったことがないようにしていただきたいと思っております。

これが巡回プロット調査です。

子育て支援センターがあって、児童コーナーの横に福祉課があります。これは大変ユニークですが、僕らが観察したときでは、子育て支援センターの中ではすごくピークパーキにぎやかですが、外に出た瞬間にシーンとなって帰っていくのです。

子育て支援センターから出て、児童開架で本を借りて帰っていったという人は0人でした。これは大変もったいないなと思っております。アンケートでは、実は使ったという人がいたのですが、そのあと、逆のパターンが……。児童、開架で借りてから使っている方がいらっやったかもしれないですが、私たちがカウントしていた中ではちょっとそれはなくて、やっぱりこれは多分、話してはいけないという図書館の暗黙の了

解のような、それは大変図書館の魅力は魅力ですが、もう少し会話も許容できれば、もっといろいろな使い方ができるのではないかと、ちょっとここではそう思いました。

すごく僕は画期的だと思ったのです。もう教育委員会のカウンターと福祉課のカウンターが横に並んでいるので、それはすごいことだなと思ったのですが、その辺が見えない壁があったみたいで、ちょっと残念でした。

一宮は、この学習室が実は図書館の中にありますので、沢山人がいます。もうぎゅうぎゅうにいます。一方塩尻は学習室がありません。ですから、彼らはどこで勉強しているかというと、外で勉強しています。建物の共用部のところで勉強している。ここは会議室ですが、このときは学習室として開放されていました。

図書館の中と共用空間でやっている行為は違うということなので、複合施設の魅力というのは、図書館の中と共用部でやる行為を分けることができるということです。要は飲食、あるいはおしゃべりというものを、その外でももらえればいいので、複合というものも、それほど悪いことではないと思っております。

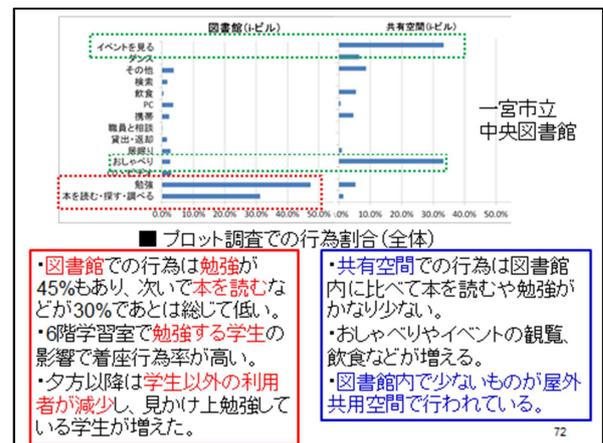


図25 プロット調査での行為割合

先ほどお話ししたように、駐車場の問題があるということで、利用者層の偏りが生じてしまう。あとは学生が使うと非常に長くなるということです。

このスライドは、皆様の資料にはないスライ

ドですが、実は『図書館雑誌』¹で、今年の4月号に複合の建築の特集が組まれておりまして、そのときちょっと私が書いた内容なのです。そのとき何を言ったかという、実は複合施設調査の際に、塩尻、田原の図書館では、図書館以外の複合施設全体にアンケートを配って聞いています。

複合施設を使った人全員に聞くと、図書館を使わないという人たちが15%いらっしゃいました。意外と少ないと思いませんか。複合施設に図書館が入っていると、意外と図書館を使う人は多いです。8割ぐらいの人たちが確実に図書館を使っています。

ですから、複合施設の中に図書館があると、大半が図書館目的なのです。図書館は入れかわり立ちかわりたくさんの人たちが来られますので、要は、図書館が入った複合施設というのは、それなりに人を呼び込む魅力がある。

でも、複合施設といえども、よい図書館を計画しなければ図書館は使われないので、その複合施設全体の利用率も下がるだろうと。だからあればいいというわけではないのではないかと。だから、私はきちっとした図書館をつくらないと、多分図書館を使ってもらえないということがあると思います。

複合施設としての図書館利用

- 駅前立地と駐車場と利用者層
 - ・駅前に図書館を計画すると民業圧迫や建設工事費の観点から、駐車台数が少なく、駐車料金が高く設定されることが多い。
 - ・こうした場合、明らかに主婦層の利用が伸びなくなり、台数にゆとりのある平面駐車場を持つ別の図書館を利用するようになる。
 - ・ある特定の利用者層が利用しなくなる可能性がある。
- 学生の館内での利用行動
 - ・一宮の学生の平均滞在時間は4時間と非常に長い、気分転換に雑誌コーナーや人通りの多い閲覧席に座る。
 - ・友人たちと利用すれば、おしゃべりも始まるため飲食可能な、シビックテラスのような共有空間の計画が今後は必要。
- 次世代の図書館利用者の育成
 - ・2週間に1回以上が約65%、月に1回以上が約80%と図書館はリピート利用が多く、学生利用は音への配慮を行い共存したい。
 - ・図書館には各利用者の一生涯にわたって図書館利用が続くように、長期的な視点に立った施設サービスの提供が求められる。

73

図26 複合施設としての図書館利用

それから、「ついで利用」というものがありま

す。ほかの施設と図書館を使っている人たちです。そのついで利用の人たちというのは、実は普通は2割と言われていています。20%ぐらいの人たちがついで利用と言われていています。だから、あまり増えません。公民館とかホールとか一緒に複合していても、ついで利用が増えることはあまりなくて、大体2割ぐらいしかないので、この塩尻は、実はそのついで利用者の人たちが3割を超えています。これは大変高いと思っています。

このついで利用が3割と高いのは、実は壁で仕切られていないというのが効果的ではないかと思っております。これはまだ今後の課題です。

時間がもう来ましたね。ちょっと飛ばしましょうか。

こちらの東京女子大学はマイライフ・マイ・ライブラリーという、ラーニングコモンズでないものを整備されています。

こちらは明治大学和泉図書館です。今、日本で最先端の大学図書館と言われていています。この開発の企画が、「図書館に寝に來い」だったので。寝に來ていいということで、このリクライニングソファという、ほんとうに寝る用のソファが置いてあるのです。

こちらは滞在時間の調査で、ここはやっぱり変わりません 図27。ほとんど同じです。

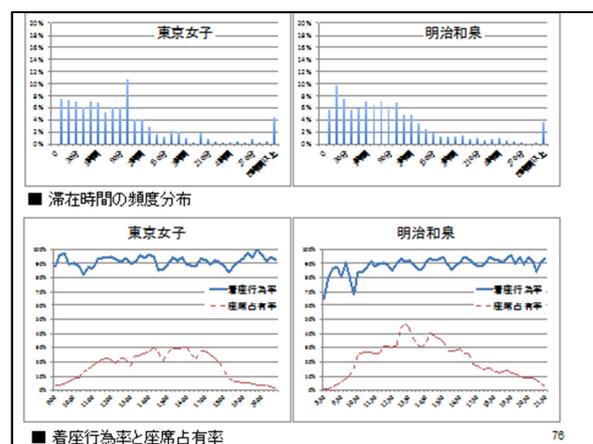


図27 複合施設としての図書館利用

これは明治大学の図書館ですが、ちょっとプロットを見ていただくと、書架にほとんど人が

¹中井孝幸：複合施設内の図書館はどのような機能によって利用者にアプローチすべきか、図書館雑誌，4月号，p.222-225，2016.4

おりません。2、3、4階とありますけれども、ほぼ同じ状況です。結局、彼らは何をやっているか、彼らは本を読んでいないのか。そんなことはありません。実は勉強しているところには必ず本が置いてありますので、本も使っているのですが、借りるための本を探している感じではないですね。勉強するための図書館なので、やっぱり公共と大学ではちょっとそのあたりから考え方が違うかなと思いました。

今度は愛知県の椋山の大学です。ラーニング commons ができました。改修です。

愛知学院も新しく改築されました。

名古屋学院は元々新しくつくってました。

改修されましたので、改修前と改修後で何がよくなったかということ聞いています 図28。そうしますと、椋山と愛学というのはラーニング commons のほうが高くなっています。

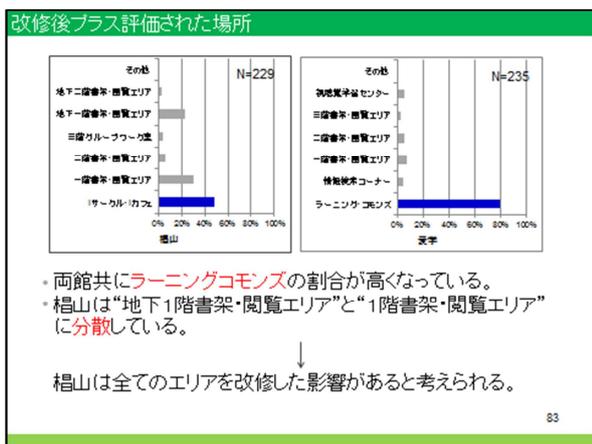


図28 改修後プラス評価された場所

では、何がよくなったかといったときに、椋山女子大学というと、「水分補給ができる」というのが一番高くなっている。椋山の学生は乾燥しているのかよくわからないのですが(笑)でも、女子大学って結構厳しいのです。東京女子大学もそう思いましたが、何かルールがやたらと厳しかったです。基本的に飲食禁止なのです。ふたつきのペットボトルもだめです。

愛工大などは、蓋付であれば良いという感じでしたが、女子大学は結構やっぱり厳しいので、その辺かなと思っております。

あとはマイナス評価です。悪くなったところ

はどこかと聞くと、これもラーニング commons が高いのです 図29。

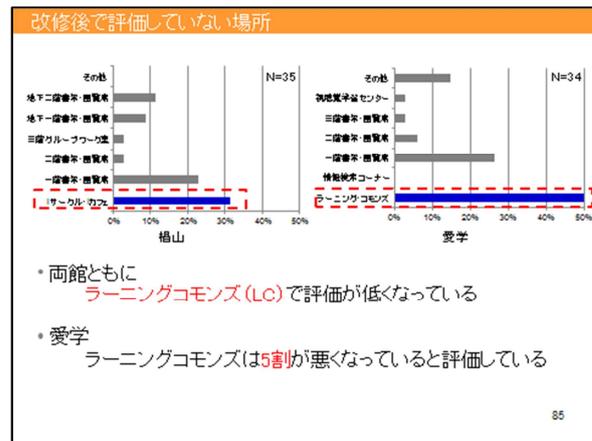


図29 改修後で評価していない場所

これは圧倒的に分母の数が少ないので、大半はよい評価をしてもらっているのですが、悪い評価のときのラーニング commons が高くて、これがやっぱり「うるさい」というのがあります 図30。やっぱり評価する反面、マイナスの評価もあると。

今回、椋山は、実はラーニング commons だけではなくて、ほかの階も改修しています。だから静かに勉強できる場所もつくったり、にぎやかなところもつくったりしていたのですが、実は愛知学院はラーニング commons だけしかつくらなかったで、そこを使っていた人たちが、自分たちの居場所がなくなっているというか、場所がないんです。

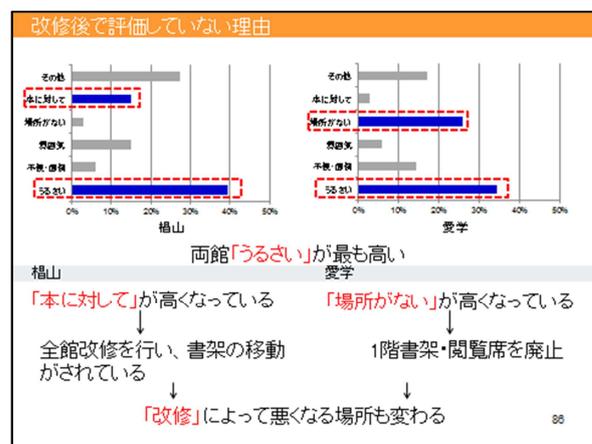


図30 改修後で評価していない理由

梶山は実は「場所がない」が減っています。それはなぜかという、違う場所に移動しているからです。要はこの人たちは移動できた。でも、愛学は移動できなかった。この人たちはどうするかという、多分この人たちはもう使わなくなっていくのではないかと思います。ですから、改修によって利用者が減っていくというのは大変残念だと思います。

あとは、ラーニングcommonsだから、みんな喋るだろうと思われるかもしれませんが、そんなことはなくて、1人で使っている人がとても多いんです。結局、開架スペースでも1人、ラーニングcommonsでも1人。結局、割合はあまり変わりません。7割ぐらいの人たちは1人で使っています 図31。



図31 エリアごとの同伴形態

ですから、これはどういうことかという、滋賀県の野洲の図書館の話と同じです。要はわざわざしているところで1人で勉強するのがいい人と、ほんとうに誰もいなくて1人で集中したい人とが分かれているということです。

結局、図書館の一番のメリット、図書館とは何だと言われたときに、僕は1人で来られる施設だと思っています。1人で利用できるというのは、意外と図書館と公園ぐらいしかないのではないかと考えていまして、要は1人で使う。それはいろいろな身の置き方ができる。

あとはグループで使うことも可能です。そのかわり、グループでほんとうにしゃべりたい人たちは、個室を選ぶのです。要は、1人で使い

たい、ほんとうにもう誰もいないところで勉強したい人と、グループだけで、自分たちだけで集中してしゃべりたい。ラーニングcommonsなどでしゃべると周りの人たちがうるさいので、自分たちが集中できない。ほんとうに集中したい人たちは個室でしゃべります。

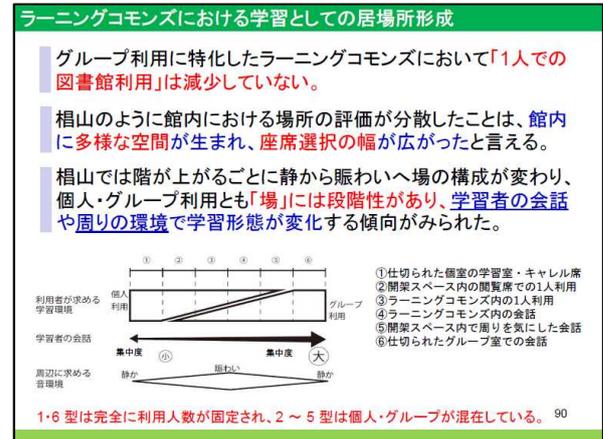


図32 ラーニングcommonsにおける居場所形成

要は、1人からグループ利用でも、各段階がある。今、6段階ぐらいあるのではないかと考えています。これは学習空間に対する思いですけれども、全部で6段階ぐらいあり、1人で使うにも3段階ぐらいあるし、グループで使うにも3段階ぐらいあるのではないかと考えています。ですから、いろいろな場所を提供することが大事です。

最後です。

島根県の海士町に図書館があります。これは隠岐の島の本土から60キロぐらい離れているところで、私も行きましたが、台風が来て帰れなくて2泊ぐらい延泊しました。もうフェリーがないと何もできない、ほんとうの島です。これは島まるごと図書館構想という、大変ユニークなことをやられておりました、14館、全部の図書館を調査してきました。

14館もありますので、全部に人を配置することはできなかったのですが、海士町の中央図書館のほか、保育園や学校などに分館があります。高校は「島留学」というちょっと変わったことをやっています。

ここは何が魅力かという、もともとカキの

養殖で、イワガキというのは大変傷みやすく、なかなか遠くへ出荷できなかつたのですが、冷凍の仕方によって遠くへ出荷することができるようになって、その冷凍庫、冷凍する機械を町がつくれます。町がそういったことを整備したことによって、ビジネスチャンスができて、Ｉターン組が増えたのです。そのビジネスチャンスで何かやりたいと。

そのＩターンで来た人たちが、ここには図書館がないという話になりまして、図書館をつくれという話になりました。それで、どうかというときに、今町内の本はどこにあると聞いたら、学校だと。だから、学校に職員を配置しよう。まず保育園、小学校、中学校、高校に司書を置きます。そこからスタートしました。

そこからいろいろな町の施設に、分館と称している本棚に、本を置き始めて、最後に中央図書館ができます。これはまるで日野のＢＭから始まった、あの図書館のようなつくり方と同じです。そこからできております。

そのときに、小さな町なので、ここも車ではなかなか移動できませんけれども、中央館だけかと思ったら、そうではなくて、意外と分館も使われております。島全体で各分館と中央館といろいろな図書館を使っていて、特に課題としては、「島まるごと図書館構想」というものを打ち出した後に移住してきている人たちが、図書館の利用者の大半を占めています。だから7割ぐらいが、その構想以後の人です。

以前の人たちはまだ利用が少ないということになっています。では、その人たちは使っていないかということはないです。その人たちは分館をちゃんと使っていて、Ｉターン組の人たちは分館も中央館も両方使っています。

今までの分館と中央館ではなくて、実はカフェというか、100円のセルフで飲む、ただコーヒーが置いてあるだけですが、それを飲みに来るだけの人もいます。要するにこの海士町では、図書だけではなくて、先ほどの愛東図書館のように、人と話すとか、そういったことを目的にしている、我々はこれを「充実利用」と名づけて

います。要は図書館利用だけではなくて「充実利用」、ほかのそういったコーヒーを飲む、友達とお話しするというのも図書館でやる、そういった場所として海士町の図書館は今使われています。

それから、あとは学校図書館でもものすごく子供たちは本を読んでいます。それは幼稚園、小学校、中学校、高校まで、手厚く本をサポートしているからです。

これからこの学校図書館と公共図書館の連携というのは、ひょっとして鍵ではないかと思っ

まとめと今後の課題

- ・昨今の図書館整備には「にぎわい」の創出が期待。
- ・図書館の基本的な役割
 - ①地域の様々な課題解決のための利用者への資料提供
 - ②記憶の倉庫として地域の歴史や文化を記録していくこと
- ・東日本大震災では沿岸部の多くの図書館が津波被害。
- ・地域の歴史や文化を記録した資料や貴重なコレクションが流失。
- ・残ったものや新しいものを今から数十年かけて丁寧に集めていく。
- ・地域に愛される図書館は、一時的なにぎわいの創出だけではない。
- ・20年から30年をかけてゆっくりと使い込まれて醸成されていくもの。

■今後の研究課題

- ・図書館のハコモとしての意義(記憶の倉庫、知識の巢...)
- ・50年後の「場」としての図書館像
- ・「ゆるやかな機能連携」など複合化した図書館
- ・学校図書館と公共図書館が連携して地域の読書環境を支援[※]

図33 まとめと今後の課題

私はにぎわいの図書館があってもいいと思っていますけれども、やはり図書館の基本的な役割というものは、地域の課題解決であるということと、記憶の倉庫として歴史や文化を記録していくことだと思っています。

それが今後50年、60年、要は今のことだけではなくて、20年、50年先のことを考えて、これから図書館というものを考えていくべきではないかと思っております。

大変済みません、オーバーしてしまいましたが、これで終わります。ご清聴どうもありがとうございました。(拍手)

了